25）『素問研』について

Bikriographical Studies on the "Somon-ken"

川口市　宮川　浩也

Kouya Miyakawa

近年，稲葉通達著の『素問研』（全8巻，1冊）が影印刊行された（オリエント出版社，1987年）．著者およびその書誌については刊行時に附された解説に詳しい．しかし，その成立（18世紀後半と考えられている）や著者の稲葉通達について（生卒など）はいまのところ詳細には判明していない．

この著は解説者に「『素問識』にまさるとも劣らない」と評価された．『素問』の学理を明らかにする上で欠くべからざる注釈として，また江戸中期の『内経』学を窺う上でも重要な位置を占めているのである．しかし通覧してみると，略字・俗字，空白や全く読めない字が散見し，書き入れなどがあり，『素問研』の原貌にほど遠い感がある．さらに詳細に検討してみると誤字・誤抄を多数見出すことができる．よって，この影印された状態で研究すれば稲葉通達の論旨を誤ることは必至である．考証学では「書，校勘せざれば読まざるに如かず」（清・葉徳輝『蔵書十約』）といい，校勘しない書は読まないに越したことはないという．とくにこの書『素問研』は前述の状況から研究の第一に校勘の作業がもとめられよう．よって，テキストの校勘という角度から初歩的に『素問研』を検討する．

1. 対校資料

『素問研』のテキストには次の両種がある．

① 今回影印された東京大学附属図書館所蔵の江戸医学館の旧蔵の抄本．抄写年代・抄写した者は不明．

② 東京大学附属図書館鶚軒文庫所蔵の高島氏旧蔵の抄本．抄写年は1849年．抄写者は不明．

①の抄写年が未明のため両抄本の先後は断定できないが，②が①の誤りをそのまま踏襲し，空白や難読字は空白とし，書き入れ（傍記）を整理していることなどから，おそらく①が②より早くに抄写されたことがうかがわれる．しかし若干食い違うところもあるので断定はできないが，解説者のいうように①を祖本とするほうがより長じているとおもわれる．

2. 他校資料

『素問研』は喜多村直寛の『素問講義』（1854年成）に「稲云」として，伊沢棠軒の『素問釈義』（1867年成）に「研云」として多く引用されている．両種の引用文は①ないしは②のテキストと字句の異同がみられ，その底本については断定できない．さらに『素問講義』には現『素問研』にはない文章が2条，『素問釈義』には5条，それぞれ引用されている．さらに森立之の『素問攷注』にも1条（『素問講義と重複）の佚文がある．以上のことから，当時において①，②のテキストに限らない数種のテキストが流伝していたものと思われる．いずれにしても，これらの引用文は『素問研』の校勘の資として貴重である（副次的であるが）．

3. 『素問』の底本について

『素問研』は荻生徂徠の『論語徴』に倣って，原文の部分的な句を標出して以下に注釈を加えているが，その句（原文）を顧従徳本『素問』とを比較してみると多くの箇所で食い違う．つまり『素問研』の『素問』の底本は顧従徳本ではないと断定できるが，底本はどれかについては不明である．というのは，文字の明確な14条の句について，24巻本の顧従徳本・周日本・寛文3年刊本，12巻本の古抄本・元刊本・熊宗立本，『太素』，『甲乙経』，注解書の『素問呉註』・『素問集注』・『類経』と総合的に校勘してみたが14条すべて合致するものは無かったからである．おそらく，『素問研』の標出された『素問』の句は稲葉通達の手（改正）を経たものだろう．

4. まとめ

正しく『素問研』を読むとすれば，少なくとも対校・他校をおこなう必要がある．さらに，すでに誤って伝抄されている箇所も数多くあるので，できる限り出典にあたって確認しなければならない．この煩些な作業を経てこそ『素問研』の『素問識』をこえる価値を引き出すことができよう．